

A6 海域（有明海諫早湾）の問題点と原因・要因の整理

【有用二枚貝の減少】

1 アサリ

① 現状と問題点の特定

アサリはA6海域（諫早湾）で1979年に1,775tの漁獲を記録し、1996年まで1,000トンを超える漁獲量が見られたがその後徐々に減少し、近年は300t以下で推移している（図3）。

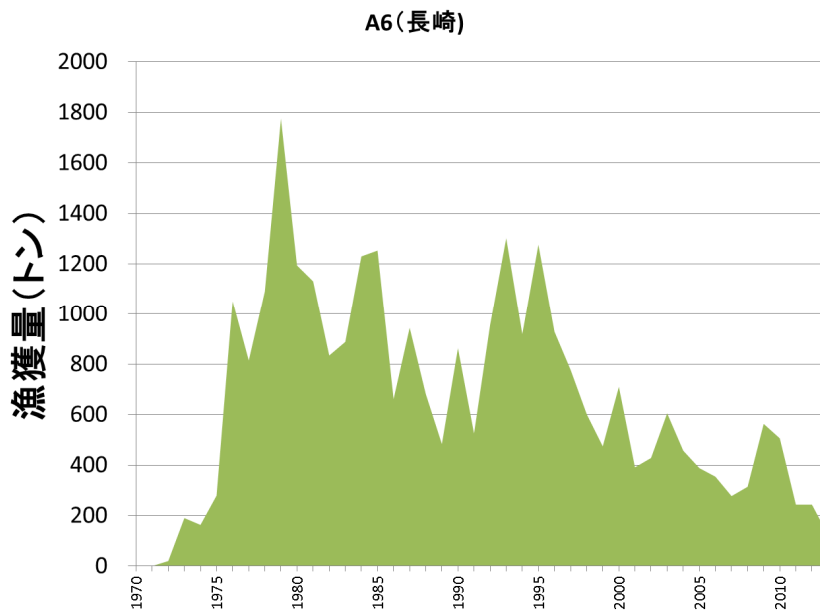


図1 A6海域のアサリ漁獲量の推移

出典：農林水産統計より整理

② 要因の考察

アサリ資源はA6海域のうち、北岸に位置する小長井地区での生産量がほとんどを占める。諫早湾におけるアサリ資源の減少に係る要因としては、1) 漁場の縮小、2) 底質環境の変化、3) ナルトビエイによる食害、4) 有害赤潮と貧酸素の影響があげられている。

底質環境の変化に関して、本海域はA3海域同様に海水の滞留性が高く、元々泥質干潟が広がる海域であるため、アサリの生息には厳しい環境である。しかしながら、アサリの生産が難しい漁場に覆砂を施すことにより稚貝の着生と生産が認められ、こうした人為的取組等により、A2海域やA4海域と比較すると、漁獲量の減少がやや緩やかである。

食害については、ナルトビエイが満潮時に干潟のアサリ漁場に出現してアサリを食害することが指摘されておりナルトビエイによる食害は、近年のアサリ資源の減少の一因と考えられる。

資源管理について、浮遊幼生や着底稚貝の量が低位で推移している中での資源管理方法が確立されていない。

有害赤潮による影響に関して、諫早湾においては貧酸素水塊がシャットネラ属の増殖を促進していると考えられたことから、大量死の要因として想定されていた（H18 有明海・八代海総合調査評価委員会報告）。室内試験の結果、シャットネラはアサリのろ水活動を顕著に阻害するものの、赤潮密度でのへい死等は室内試験によっても確認されていない（水産総合研究センター2011）。よって、シャットネラ赤潮の増大が直接アサリ資源に影響している可能性は考えにくい。

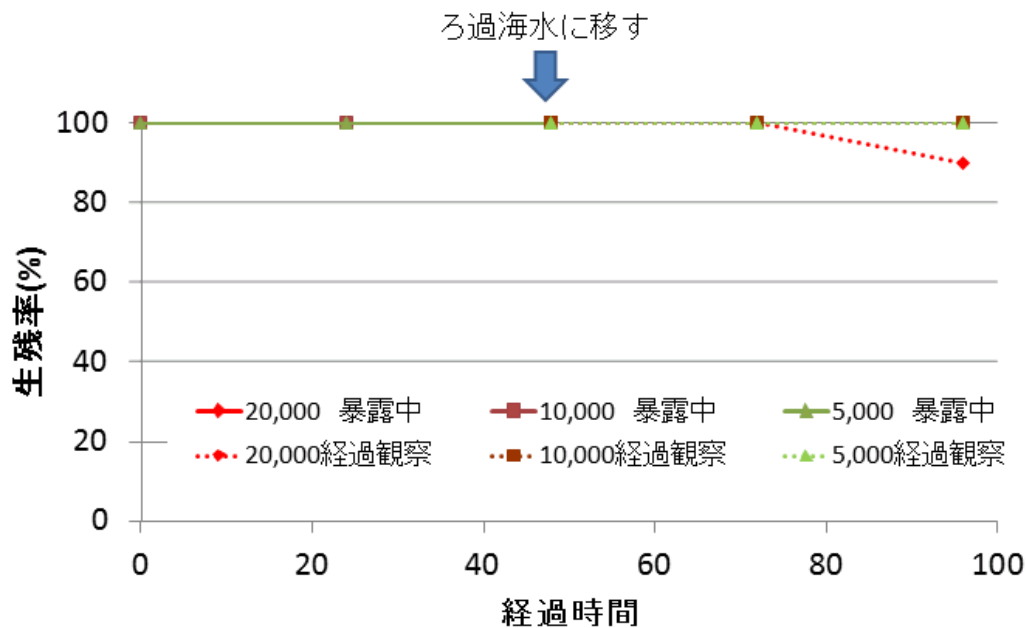


図 2 アサリの生残に対する培養シャットネラの影響評価
(数字は cells/mL)

出典：鈴木・伏屋・吉田・松山（2011）平成 22 年度赤潮・貧酸素水塊漁業被害防止対策事業「シャットネラ属有害プランクトンの魚介類への影響、毒性発現機構の解明、漁業被害防止・軽減技術に関する研究報告書」, p. 27-34.

《まとめ》

アサリの資源管理について、浮遊幼生や着底稚貝の量が低位で推移している中での資源管理方法が確立されていない。

（底質の泥化については、海域小委員会資料 4-6 の 6 ページ参照。）

本海域は、元々アサリの生育に適さない泥質干潟が広がる海域であるため、漁場に覆砂を施している。

ナルトビエイによる食害について、有明海全域における二枚貝全体の漁獲量に対する食害量の割合を試算すると、平成 21 年は 4 割弱と最も大きかったが、近年 7 年間の平均では 2 割弱であった。